

台湾の伝統的居住文化にみる 空間概念の源流に関する研究

HSIAO TZU WEI
指導教員 八尾 廣
建築設計計画 I 研究室

1. はじめに

1-1. 研究背景・目的

台湾は、西方の中国大陆から 130km、東北側の沖縄島より 600km、南側のフィリピン島より 1200km に位置し、さらに、太平洋にも面している。海上交通の要衝となるような地理的位置にあるため、原住民の時代から人々の往来が盛んに行われてきた。台湾には元々複数の民族に所属する原住民が住んでおり、17、18 世紀からは多くの漢民族が中国大陆より流入した^{注 1)}。台湾の居住文化を理解する上では、原住民の文化、漢民族の文化および、外来の文化など、多様な文化の影響を受けてきたことを把握しなければならない。

現在の台湾では、近代化にともない多くの人はコンクリート造の家に住むようになり、伝統的な居住形態は失われつつある。しかし、古来より多様な文化の影響を受けてきた台湾の居住文化には、今もなお独自の空間に対する意識や空間概念が形成されていると考える。本研究では、居住文化の源流としての原住民の住まい、漢民族の住まいの居住形態と様式を把握し、それらの空間概念を抽出することを通し、台湾固有の空間概念についての考察を深めたい。

1-2. 研究対象・方法

歴史的に見ると台湾の原住民は約 400 年前から存在しており、文献記録上これら原住民の文化が最古の台湾文化であると言える。その後、漢民族が台湾に移住して以来、約 350 年の歴史がある。原住民の住居および、後来の漢民族の住居を、台湾の主たる居住文化の源流であると捉え、本論の研究対象とする。

台湾原住民の居住形態については、残念ながら伝統的な住居は現存していないが、現在でも原住民は台湾の少数民族として存在しており、各々の民族によって言葉も文化も異なる。しかし、多くの原住民は漢人と同化し、伝統な文化を純粋に守って生活する者は少ない。

既往研究については、管見の限りでは台湾人による研究は殆ど見られなかったが、日本人の建築学者千々岩助太郎による「台湾高砂族住家の研究」が台湾国家図書館に所蔵されており、数少ない貴重な研究記録であることがわかった。台湾の「九族文化村」において再現された原住民の住居も氏の研究に基づき復元されたものである。それゆえ、氏の研究は原住民住居の研究の中で最も詳細で貴重な記録である。

千々岩の研究は第一報から第五報まであり、各々の民族の現地調査による手描きの住居平面図、立面図、断面図、写真記録が残されており、居住形態についての実態を記す簡易な文章記述もある。千々岩による手描きの図面記録は極めて貴重な資料であるため、これらを AutoCAD および Adobe Illustrator によりデータ化した。そして、原住民の 6 民族であるパイワン族、ブヌン族、ツォウ族、アタヤル族、サイシャット族、アミ族の居住空間について分析図を作成し、各々の民族に対して居住形態、住居の空間構成と構成要素を分析する。

漢民族の伝統的住居については、中国より伝来した三合院、四合院の形式をもつ中庭型住居であり、一部は政府により保存され現存している。

既往研究については政府による遺構研究があり、政府と民間の建築事務所が協働して民家の研究と修復を行い、その都度、詳細な遺構研究報告書を残している。国の文化遺産でもある保存遺構は歴史的価値が高く、本論の研究対象として優先的に分析する。それらの中で台北における林安泰古厝、桃園における大溪簡氏古厝と大溪李騰芳古宅、台中における龍井李宅と神岡筱雲山莊呂宅と潭子摘星山莊と社口林宅を例に挙げる。

各々の遺構研究報告書には配置図、平面図、立面図、断面図があり、家族の歴史的背景、敷地分析、現状調査、再利用計画、施工写真なども記録されている。これらの報告書に記載の図面についても AutoCAD および Adobe Illustrator によりデータ化した。その上で、三合院、四合院の居住空間の分析図を作成し、各々の民家に対して居住形態、住居の空間構成と構成要素を分析する。

さらに、「台湾各地方誌」^{注 2)} も参照し、当時の都市建設、人口制度、風俗文芸等の背景を理解しながら原住民と漢民族の住居に関する情報を補完する。

2. 台湾における 20 世紀以前の伝統的な居住形態

台湾は先史および原住民時代、オランダ統治時代、鄭氏政權時代、清朝統治時代、日本統治時代、各々の民族による支配を経験した。先史および原住民時代には、原住民は漁獵や狩獵を生業として生活していた。原住民の住居は漢人に「小さな家」と呼ばれていたが、その形式は多様であり、石造、茅葺など比較的素朴なものであった。清朝統治時代には、台湾は中国福建省に組み込まれ、福建省より多くの漢人が流入した。漢民族は農耕を生業とし、中央の山地より耕作しやすい西側の平地に定着し、

漢民族の集落と都市を形成した。漢民族の住居は土造、木造、煉瓦造およびそれらの混構造など、様々な構造を組み合わせ建設された。

民族により居住形態は様々であるが、漢民族は原住民より建築技術に優れ、漢人の人口増加と原住民との同化と共に、原住民の伝統的住居は減少し、三合院や四合院形式の住居が増加した。

2-1. 台湾原住民の居住文化について

台湾原住民^{注3)}の由来は確かではないが、人類学的視点によれば、その居住文化もまた中国大陆より伝来したと考えられている。布野(2005)は民族の拡大について、約6万年前一部の民族が中国大陆から東方および南方へ拡大したとする仮説を紹介している¹⁾。「臺灣府誌」の記録によれば、台湾原住民は中国の「金人」であり、中国大陆において、「元」が「金」を滅ぼす民族紛争が起こり、満州人である「金人」はモンゴル人である「元人」を避け、海を渡り台湾に移住したとする。移住当初は海側に集住していたが、海賊により迫害され山地へも移動したという²⁾。清朝統治時代においては、平地における原住民である平埔族は、漢民族により不従順な一部は殺され、一部は山地に逃れた。最終的には、漢民族と雑居し、漢人との交易や和合が行われ、漢人の定めた「土番社學」により言葉と文化を学ぶことを通し²⁾、漢人と同化した。一方、山地に逃れた高山族は、民族ごとに分かれ山中に散居し、各々の領域を定めた。彼らは民族意識が高く、自らの領域を守るために外来の漢民族と戦っている。さらには各々の民族同士の間でも互いに争い、「首狩り」という習慣もあったという。家の「首棚」には他民族の首が装飾として置いてあり、祭祀及び身分の象徴であった。

2-1-1. 平埔族の住居

平埔族は高山族より漢民族化される時期が早く、言語、衣装、住居などが徐々に漢人と同化していった。平埔族の住居に関する記録は「台湾各地方誌」にあるが、文字のみであり、図面や写真は掲載されていない。平埔族の住居は地方により居住形態は多様であった。住居の図面がないため、建材の使用及び、平地式か堅穴式であるか判断できるが、様式を詳しく分類することは困難である。

2-1-2. 高山族の住居

高山族の住居に関する記録は「台湾高砂族住家の研究」に記載されている。パイワン族、ブヌン族、ツォウ族、アタヤル族、サイシャット族、アミ族、各々の民族によって居住形態が異なり、堅穴式、平地式、高床式、茅葺建物、石造建物、木造建物、竹造建物、土造建物がある。住居平面については、千々岩(1942)は、在来のは単室であったが、近來は漢民族の影響を受けて複室になったと述べている。平面形状については、ツォウ族は楕円形と凹凸矩形、サイシャット族は凹凸矩形、他の民族は全て長方形である。住居の外周部に爐、寝台、穀倉、物置等が設けられ、居間を中心とする求心性をもつ。住居と庭は石積の塀に囲われ、境界により居住領域を明示

している。アミ族の住居においては、居間と庭の間に土間の作業場と物置場が設けられ、日よけ雨よけの庇により内外を繋げる緩衝領域が設けられている。

パイワン族、ブヌン族、アタヤル族の堅穴式住居は山地の寒暖差に対応し地熱を利用し、石造と木造で作られている。アミ族の高床式住居は湿気を避けることができる。ツォウ族の集会所や他の民族の穀倉も高床式である。原住民の住居は周囲の自然環境に対応し、さらに漢民族の住居の影響を受けたこともあり極めて多様性に富む。

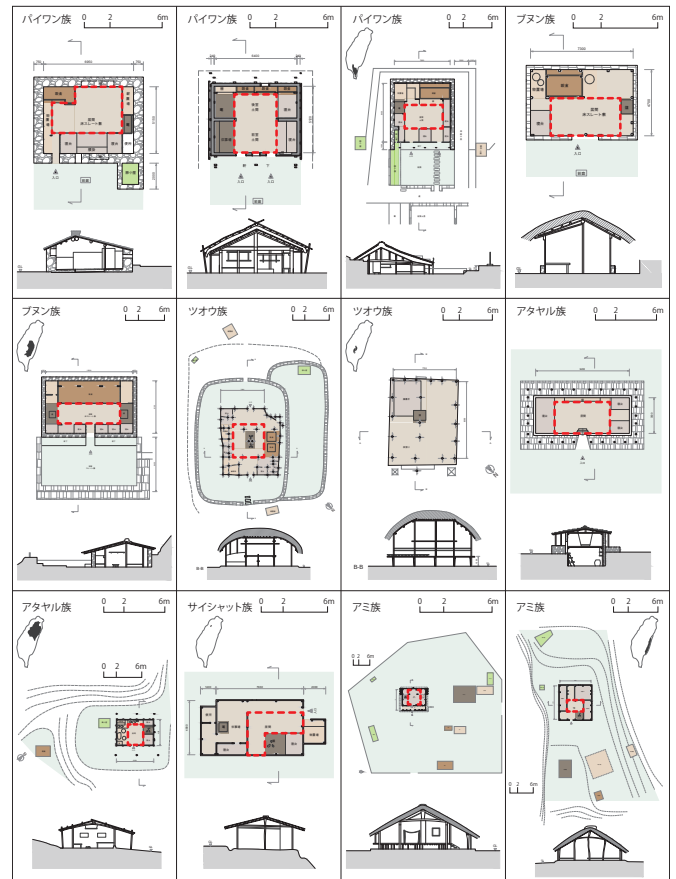


図1. 高山族の住居平面、断面図³⁻⁶⁾

2-2. 漢民族の居住文化について

17から18世紀にかけ、漢人は福建と広東より台湾に移住した。農業および商業を生業として生活し、「血縁」^{注4)}と「地縁」^{注5)}により集落を形成した。漢民族の居住文化は風水や長幼と男女の序に従い、川と山に囲まれる環境を好んだ。風水に従うため、住居は南向きや西向きに配置され、山を背に抱き正面には池を設ける形をとる。自然の山がない場合には小さな丘を作るか、あるいは周囲に竹林や樹林を設けることにより、人工的に居住環境を形成した。中国の伝統的住居である四合院は、同じ形式でも地域により大きく違いがある。その中でも、福建省の四合院住居の、横に広い平面形や棟の配置の特徴は、台湾の四合院住居と最も類似性が高い。福建省から流入した漢人が、その居住文化をベースとし、台湾での住居や集落を発展させてきたことは明らかである。

2-2-1. 漢民族の住居

台湾の三合院、四合院形式の住居は赤煉瓦の外壁と切妻の瓦屋根に特徴をもつ。住居の空間構成には「一字型」、「L字型」、「コの字型」、「口の字型」等の配置の類型があり、いずれも中心軸をもち左右対称である。中央の中庭を住棟が囲う主体部分を起点とし、主としてその左右に順次庭を囲う住棟が増築され、横に広がる形式をもつ。

三合院の事例は桃園大溪簡氏古厝（建設年 1826～1899）、台中龍井李宅（建設年 1840～1883）、彰化馬與陳益源大厝（建設年 1846～1965）、桃園大溪李騰芳古宅（建設年 1860～1864）がある。三合院の平面を見ると、「コの字型」により、中央の主体部が構成されている。住居には表と奥があり、主体部の手前に前庭が設けられ、中庭を囲う各住居単位への入り口が設けられている。「コの字型」は増築が二重になる場合がある。奥側には中庭が設けられ、各部屋が中庭に面して配置されている。中庭を通して、表側と奥側の住戸は繋がっている。その上で、増築の場合には主体部の両翼に庭と各部屋が設けられ、「一字型」、「L字型」、「コの字型」の平面形状が形成される。主体部両翼の増築部も二重になる場合がある。両翼の増築部は主体部と同様に、内側と外側に分けることができ、中庭が設けられ、各部屋が中庭に面して配置される。

四合院の事例には台北林安泰古厝（建設年 1783～1823）、台中神岡筱雲山莊・呂宅別荘（建設年 1866～1944）、台中潭子摘星山莊・林宅別荘（建設年 1871～1879）、台中社口林宅（建設年 1875～1878）がある。四合院の平面を見ると、「口の字型」により、主体部が構成されている。主体部には中庭が設けられ、各部屋が中庭の周りに配置されている。増築の場合は主体部の両翼に庭と各部屋が設けられ、「一字型」、「L字型」、「コの字型」の平面形状が形成される。両翼の増築部が二重になる場合があるのは三合院と同様である。

これらの住居が建設された当時は民族どうしの紛争、強盗など社会情勢が不安定であったため、集落も住居も外部に対して閉鎖的であった。町も城壁で囲われていたようである。城壁や住居の赤煉瓦の外壁は、境界領域の表現であり、内外の関係を明確に分けている。一方で、三合院と四合院の住居は内部に対しては開放的である。庭は住居の内外をつなぐ中間領域となっている。住居全体は中庭を通して一体となるが、同時に、各住棟への出入りの導線は独立しており、家族成員の生活空間とプライバシーを守ることができるづくりである。

3. 空間概念の分析

原住民と漢民族に対して居住形態、住居の空間構成を分析する。構成要素を抽出して分析図を作成し、各々の様式を分類と統合する。

3-1. 原住民住居の空間構成における形式の多様性

千々岩による手書きの図面を読み取り、集落類型、居住形態、生活要素の配置により、住居様式を分類した。集落全体の配置図がないため、平面図における隣家の標

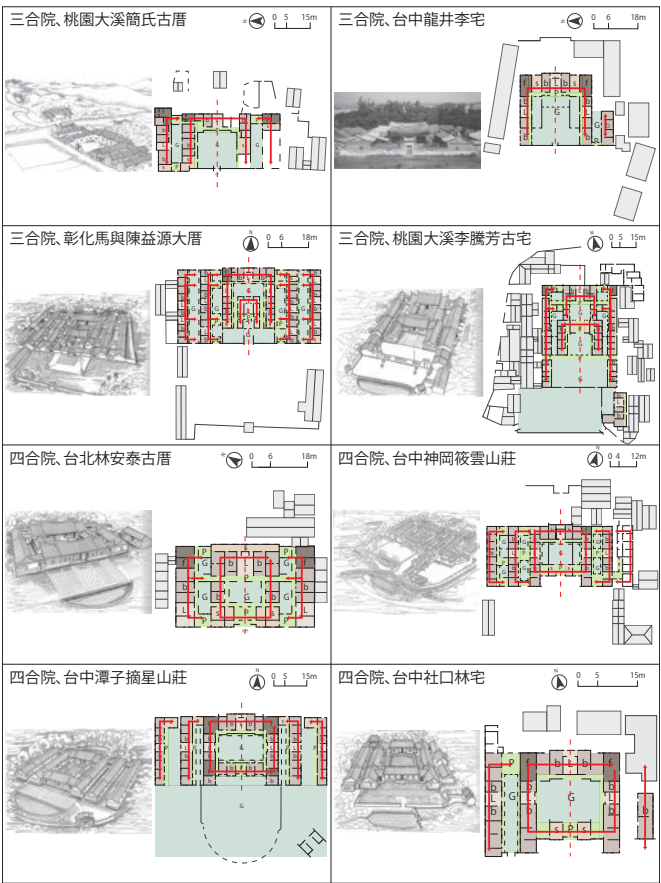


図 2. 漢民族の住居平面図 7～15)

記と集落の写真より推測した限りでは、集落類型は集合型と離散型に分類することができる。また、断面図により、居住形態は平地式、竪穴式、半竪穴式、高床式に分類することができる。屋内外に配置される、居間（Living）、寝台（bed、bench）、穀倉（granary）、炊事（fireplace）、物置（storage）、動物小屋（Animal）、庭（Garden）といった 7 つの生活要素の配置は、矩形集中配置、矩形分散配置、変矩形分散配置に分類することができる。

集落類型	居住形態	生活要素配置
集合型	平地式 GL (Garden) House (Garden)	矩形集中配置 G (A, G)
	竪穴式 GL (Garden) House (G)	矩形分散配置 A, G, S, H (A, G, S, H)
	半竪穴式 GL (Garden) House (G)	変矩形分散配置 A, G, S, H (A, G, S, H)
離散型	高床式 GL (Garden) House (Garden)	

図 3. 原住民の住居類型のまとめ

各々の民族の住居は以下の分類となる。1) パイワン族：集合型・平地式・矩形集中配置の住居、集合型・竪穴式・矩形集中配置の住居、集合型・半竪穴式・矩形集中配置の住居の 3 つの類型がある。2) ブヌン族：集合型・平地式・矩形集中配置の住居、集合型・竪穴式・矩形集中配置の住居、離散型・竪穴式・矩形集中配置の住居の 3 つの類型がある。3) ツオウ族：離散型・平地式・矩形集中配置の住居、離散型・平地式・変矩形分散配置の住居、離散型・高床式・矩形集中配置の住居の 3 つの類

型がある。4) アタヤル族：集合型・平地式・矩形分散配置の住居、集合型・堅穴式・矩形分散配置の住居の2つの類型がある。5) サイシャット族：集合型・平地式・矩形分散配置の住居、集合型・平地式・変矩形分散配置の2つのタイプがある。6) アミ族：集合型・平地式・矩形分散配置の住居、集合型・高床式・矩形分散配置の住居の2つの類型がある。

3-2. 三合院、四合院における漢民族居住環境の構成

各々の報告書の図面を読み取り、居住形態と生活要素の配置により、住居様式を分類した。平面図により、一字型、L字型、コの字型、ロの字型の配置を組み合わせ、居住形態は三合院複合型と四合院複合型に分類することができる。庭 (Garden)、居間 (Living)、寝室 (bed、bench)、炊事 (fireplace)、物置 (storage)、廊下 (Passage)、といった6つの生活要素が中庭を中心とする前後・左右の対称軸に沿って「G/P/L」と「b/L/b」の順に配置され住居空間の骨格を形成している。

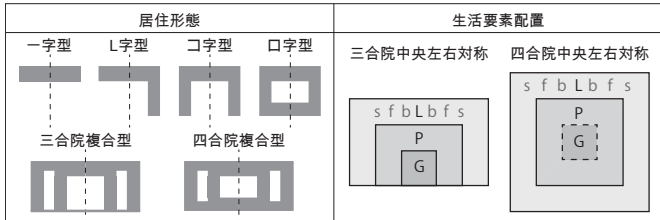


図 4. 漢民族の住居類型のまとめ

4. 考察

4-1. 空間概念と民族意識

原住民と漢民族は境界領域に対しての意識が高い。共に敷地を囲い、その範囲内で自分の生活空間を形成する。さらに住居自体にも中心性がある。原住民の住居では生活要素を外周部に配置し中央の生活空間を形成している。原住民は自然環境や社会的防御への対応により住居形式を各々形成した。漢民族は開放的な庭を中心に置き、その周囲に家族のための空間を秩序だて配置している。漢民族は中国を源流とする住居計画の方法論をもつ。原住民と漢民族の住居には大きな違いがあるが、住居境界への意識と中心性をもつ構成においては共通点がある。

4-2. 居住の変化と展開

原住民の住居は各々の民族により大きく異なる。高山族の場合は山地を利用することが多い。住居や建材は地理的環境に応じて変化し、自然素材が用いられ、石造、土造、竹造、木造、平地式、堅穴式、半堅穴式、高床式など、居住形態は多様性に富む。

漢民族住居の建築様式のルーツが中国福建省の住居であることは確かである。平入の屋根の棟を両側に反り上げて伸ばす華やかな装飾の形式が閩南様式の特徴であり、台湾の住居も同様の構成をもつ。一方で、台湾の住居の平面配置には福建と異なる展開がある。福建の四合院は「ロの字型」の構成に基づき平面配置は南北方向つまり奥行き方向へ拡張することが多い。一方、台湾の住居に

は東西方向つまり横方向へ拡張する傾向がある。また、四合院を簡略化した「コの字型」三合院形式の住居の割合が多い。これは、高温多湿な台湾の気候に対応した結果であると思われる。

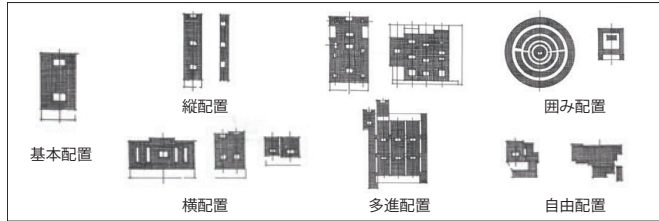


図 5. 福建省における四合院の配置形式¹⁶⁾

5. まとめ

台湾では原住民の文化を起点として様々な外来文化を受け入れ、独特な居住文化を形成してきた。本論では原住民および漢民族の居住様式とその空間概念を分析することを通して、台湾の多様な居住文化に通底する住居形式の共通性、多様性の一端を明らかにした。

参考文献

1) 布野修司：世界住居誌，株式会社昭和堂，2005
2) 鈴木串字翁：臺灣全誌第一卷～第八卷，臺灣經世新報社，1922
3) 千々岩助太郎：臺灣高砂族住家の研究，第1報，社團法人臺灣建築會，1937
4) 千々岩助太郎：臺灣高砂族住家の研究，第2報，社團法人臺灣建築會，1939
5) 千々岩助太郎：臺灣高砂族住家の研究，第4報，社團法人臺灣建築會，1942
6) 千々岩助太郎：臺灣高砂族住家の研究，第5報，社團法人臺灣建築會，1942
7) 臺北市政府文化局：臺北市歷史建築林安泰古厝調查研究修復及再利用計畫案總結報告書，2017
8) 桃園縣政府文化局：桃園縣歷史建築大溪簡氏古厝調查研究暨修復再利用計畫成果報告書，2013
9) 楊仁江：臺中縣龍井林宅研究，台中縣文化局，1996
10) 薛琴建築師事務所：彰化縣第二級古蹟馬興陳宅再利用規劃設計，彰化縣文化局，2004
11) 顏麗蓉，張恒輔，陳大榮，楊耀州：桃園縣第二級古蹟李騰芳古宅修復研究，桃園縣文化局，1987
12) 洪文雄：臺中縣縣定古蹟筱雲山莊調查研究規劃報告書，臺中縣文化局，2003
13) 楊仁江：臺中縣縣定古蹟摘星山莊暨整體修復工程委託調查研究，臺中縣文化局，2001
14) 葉添義，連慧華，潘容秋，蔡慧玲：臺中縣神岡鄉第三級古蹟社口林宅修護工程報告書，臺中縣文化局，1997
15) 李乾朗，閻亞寧，徐裕健：台灣民居，中國建築工業出版社，2009
16) 高鈞明，王乃香，陳瑜：福建民居，中國建築工業出版社，2017

注記

注 1) 台湾の歴史については、先史および原住民時代（1624 年前）、オランダ統治時代（1624 年～1662 年）、鄭氏政權時代（1662 年～1683 年）、清朝統治時代（1683 年～1895 年）、日本統治時代（1895 年～1945 年）、中華民國時代（1945 年以後）に分けることができる。台湾においては太古から台湾に暮らしてきた人々を「原住民族」と呼称しており、1994 年における憲法の追加条文にも「台湾のもともとの主人」という意味で「原住民」と明記されているため、本論では「先住民」でなく「原住民」と記載する。
注 2) 台湾各地方誌は臺灣府誌、淡水廳誌、諸羅縣志、鳳山縣志、噶瑪蘭廳志、彰化縣志、臺灣縣志であり、17、18 世紀の漢人によって編集され、地理位置、地図、山川、地形、都市建設、賦役制度、人口、祭祀、学校、武備、人物列伝、風俗、原住民、物産、気候、自然災害、文芸など、台湾各地方について詳しく述べている。
注 3) 今まで台湾政府に認定された台湾原住民は、平地における「平埔族」と山地における「高山族」に分類でき、合計 16 民族がある。
注 4) 血縁とは、家族関係がある人々は同じ居住地において一緒に生活することである。
注 5) 地縁とは、台湾に移住してきた漢人は同じ出身地の人々が集まって地域、集落を形成することである。